



『観光の世界史』のノートから (11)

### 避寒リゾート「コートダジュール」の誕生

国際観光研究家 石井 昭夫

(前 帝京大学教授)

#### 1. はじめに

コートダジュール(Côte d'Azur)とは、日本語では「紺碧の海岸」を意味し、通常、南仏の地中海岸のうち、ツーロンの東方のイエールからイタリアとの国境にあるマントンまでの海岸を指して使われている。真っ青な海と太陽の下、裸身をさらしてビーチで遊ぶ人々の姿をイメージするが、もとは英国の有閑階級の避寒リゾートとして発展した地域であって、20世紀の最初の30年くらいまでは、夏は人けのない海岸であった。フランス革命前にはプロヴァンスという地方名が南仏一帯を含む呼び名であったし、より漠然と《ミディ》という言い方が今も南仏を示す言葉として用いられる。さらに、イタリアとフランスの北方の海岸リゾート全体をリビエラと呼ぶこともある。

観光の歴史は、余暇の歴史、言い換えれば社会関係のあり方と密接に関わっている。当然ながら、労働と無縁の豊かな有閑階級の行動が近代観光の夜明けを告げるのだが、その最も注目すべき行動のひとつが、北ヨーロッパの寒くて長い冬を避けて、暖かい地中海岸で過ごすという生活のパターンを18世紀後半に始めたことである。彼らは11月頃にやってきて、春の訪れる3月末には居住地に戻るといって、ツバメのような国際移動の生活を「創造」した。その結果、ヨーロッパ独特の避寒のための国際観光リゾートが誕生したのである。避暑のためなら国内に涼しい場所はいくらでもあるが、避寒となれば南に行くしかない。彼らが真っ先に選んだのが南仏であり、のちにコートダジュールとよばれることになる海岸地帯であった。

ミディやリビエラとちがって、コートダジュールという呼び名は、古くからある自然発生的な地名ではない。名前の起こりは、政治家で作家のステファン・リエジャール Stephen Liégeard (1830~1925) が、19世紀半ば、南仏ミディの避寒客の1人として毎冬のようにカンヌで過ごし、1887年に避寒地の種々相を描いた「コートダジュール」というノンフィクション作品を書いたことに発している。リエジャール自身は本のタイトルとしてこの言葉を使用した。地名として使用したわけでも、地域全体をカバーしたわけでもなかった。そして、後世の人々も作家の名前など知らないまま、このロマンチックな名前を地名のように使うようになっていった。つまり、コートダジュールとは、地名であるよりも、ひとつのコンセプトないしテーマなのであった。18世紀半ばに先駆者によって開発され、19世紀末頃に頂点に達する有閑階級の保養・療養をかねた優雅な避寒生活を象徴する言葉となり、ひいては、そのためのリゾート地の呼び名へと変化していったのである。それゆえ、

19 世紀のマレーやベデカーのガイドブックでは、コートダジュールという言葉は使われておらず、この地域はリビエラと紹介されている。コートダジュールがリビエラのフランス海岸だけを指すようになるのはずっと後のことであるが、便宜上本稿では、それ以前についてもコートダジュールの呼び名を使用することとする。

ヨーロッパの有閑階級は、コートダジュールでの避寒と同様、スイス・アルプスでの避暑という生活も創造した。コートダジュールは、19 世紀後半から 20 世紀の初めにかけて、スイスの避暑リゾートと交互に金持ちの滞在客を受け入れたのであった。

しかし、第一次世界大戦とその後の大恐慌時代に、有閑階級の贅沢な避寒地滞在は終焉する。避寒滞在者のいなくなった後を埋めていったのが、ロストジェネレーション世代のアメリカ人客を先駆とする夏のリゾート客であった。コートダジュールは、第二次世界大戦前から徐々に夏のリゾートへと変貌し、1936 年のフランスの有給休暇法の成立とともに大衆化が始まり、第二次大戦後は、北からの太陽軍団を大量に受け入れる夏のリゾートになっていった。

以下、主としてマルク・ボワイエ Marc Boyer の「南仏の冬：コートダジュールの創造」(L'Invention de la Côte d'Azur: L'Hiver dans le Midi) によって、コートダジュールの誕生と発展と変貌を見てみよう。

## 2. 序曲：フランス革命前の状況

北ヨーロッパの冬は、日が短く、陽光が薄くて寒い。緯度を比べれば、ロンドンがカムチャッカ半島の南端に当たるし、パリですらサハリン島の中央部に位置する。それゆえ、昔から、移動の手段と滞在コストを負担できる有閑階級の人々は、冬には暖かい南仏で過ごす人たちが少なくなかった。旅行記や文学作品には、17 世紀から英国人などが単発的にリヨンやモンペリエ、アヴィニオンやエクス・アン・プロヴァンスなどの南仏都市で冬を過ごした様子が窺える。

しかし、のちにコートダジュールと呼ばれるようになる地域がそれらと違うのは、同じ目的を持つ避寒者たち (hivernants) が、同じ町や地域に寄り集まって過ごし、リゾート地が形成された点である。その最初の例がイエール Hyère とニース Nice であり、ついでカンヌ Cannes であった。ではなぜ、コートダジュールだったのか？



Copyright©旅行のとも、ZenTech

## 1) 避寒生活はヨーロッパ固有の現象

ここでいう避寒とは、グランド・ツアーのような知的好奇心に支えられたフランスやイタリアでの滞在や旅行ではなく、冬に快適な地を選んで家を借り（あるいは別荘を所有して）、必要なら家族や召使・料理人を帯同し、冬季の数ヶ月を仮の住人として過ごす行動を指している。富裕な有閑階級が多い北ヨーロッパならではの需要であり、かつ、エキゾチックで暖かい地中海が彼等の移動可能な範囲に存在したという特殊な条件によって成立し得た慣習であった。ゆえに、ヨーロッパ特有の現象といわねばならない。

コートダジュールは、アルプス山脈が直接地中海に落ち込む地形で、ローマ帝国時代から「海岸アルプス地方」と呼ばれていた。陸路の交通は19世紀後半に鉄道や幹線道路が開通するまでは、西・東・北のどちらから入るにしろ、山中に細々と通じる道路しかなく、交通は至って不便であった。

他方、冷たい北風は後背地の2,000m級のアルプス高地にさえぎられて気候は温暖、植生は多様で、北ヨーロッパから見ればエキゾチックなオレンジやレモン、オリーブや椰子などが生育し、多種類の花が咲き乱れ、そして何よりも冬も陽光豊かで健康的であり、病を癒す保養地としての適性をもっていた。

## 2) 避寒地誕生の背景

南仏プロヴァンス地方はローマ時代の遺跡も多く、16世紀に始まった英国貴族子弟のグランド・ツアーによるイタリア訪問へ向かうコースの一つであり、イタリア体験の前座の役割を担っていた。また、これとは別に、気候温暖な土地柄ゆえに保養・療養のための適地と考えられており、18世紀後半になって、これら二つの需要を併せて満たす地域としてコートダジュールが注目され始める。この地域を訪れた多くの学者文化人の証言をまとめると、この地域が、英国人を主とする外国人上流階級に注目され、避寒リゾートに選ばれる背景には次のような事情があったとされている。

- 18世紀に顕著になった新古典主義（ギリシャ・ローマ美術の様式を創作の基礎にしようとする運動）の流れの中で、イタリア訪問の人气が高まった。
- 英国人有閑階級のグランド・ツアーが18世紀に最盛期に達し、長期間のフランスとイタリアでの滞在が流行した。
- コートダジュール経由は、イタリア行きのコースのひとつであり、ニースから船でジェノアに渡るコースはよく知られていた。
- 健康志向が高まり、転地による療養を求める人たちが増え、不健康な北ヨーロッパの冬を避けて温暖な地中海で過ごしたいという需要が増大した。
- イタリアと南フランスは夏暑いので、もともと冬に行くのが望ましかった。
- 外国人の有閑階級が快適に過ごすには、孤立せずにとまって住むほうが容易、かつ快適で、社交による避寒生活が楽しめる。それには、鄙びた土地柄で開発の余地が多いコートダジュールは適地であった。

かくてコートダジュールが避寒地として選ばれ、その最初の町がイエールとニースであった。18世紀後半、この二つの町には、かなりの数の英国の上流階級家庭が毎冬避寒の為に滞在したことが文献によって確認されているが、それ以外の町や村に避寒客が訪れたという記録はない。また、モンペリエ、アヴィニョン、マルセイユ、エクス・アン・プロヴァンスなど、コートダジュール以外の南フランスの都市に避寒客が来た記録はあるが、これらは都市としてある程度成熟しており、単発的な避寒滞在客を受け入れるだけの施設やサービスに事欠かなかったからで、逆に、地元住民と分離した地区に避寒居住区を形成することはなかった。

### 3) 最初のリゾート：イエールとニース

コートダジュールで最初に避寒リゾートとなったのはイエールであるとされてきた。その根拠のひとつがコートダジュールという言葉が「創造」したリエジャールの記述である。しかし、ボアイエは、徹底的にこの地域の文献を渉猟<sup>しやうりやう</sup>した結果、それまで出典を示さずに引用されてきた「1710年にイエールで20家族が避寒生活を送っていた」などの記述には根拠がなく、避寒者に係わる最古の記録は、アルトア地方（現在のパ・ド・カレー県）総督のエルブフ公爵というのがイエールに療養のための別邸を設け、1748年にここで亡くなったという事例であることを確認した。しかし、これは例外であり、実際は、イエールとニースは、英仏七年戦争が終わった1763年以降、ほぼ同時期に避寒地として誕生したことを、初期の避寒客を実名入りで跡付けた。その上で、研究の成果を1961年のプロヴァンス歴史研究家協会で発表し、研究者の賛同を得、以後関係者もこれを支持している。

ボアイエは、偶々旅行者がしばらく滞在した事例を避寒客とみなすべきではないとして、自前の別荘なり借上げ家屋なり、仮の住居を定めてひと冬を過ごす客に限定している。既出の「コートダジュールの創造」には、事例として1763～1789年の冬を南仏で過ごした著名な避寒客の一覧表が掲載されており、家族名、過ごした年、住居の特徴、価格、証言者、評価という項目が並んでいる。例示されている15件のほとんどがニースかイエールのいずれかで、ほかにマルセイユが1件、エクス・アン・プロヴァンス周辺が2件、場所不明が2件となっている。

**保養地イエール** イエールは、ツーロンから東へ20km足らずの岬の付け根にあるコートダジュール最南端の町であり、この地域への西からの入口でもあった。気候は温暖で、エキゾチックな植物を集めた高名な植物・果樹園があり、病弱の人の保養と健康回復の療養地として、避寒客を意識的に受け入れた最初の例であるとされてきた

イエールにもニースにも、支持者というべきか紹介者というべきか、それぞれに著名人が発展のきっかけを作っている。イエールの場合、よく知られているのが、イエールを舞台にしたシャーロット・スミス Charlotte Smith(1749～1806)の長編ロマンチック小説「セレスティーナ」(全4巻、1791)である。小説の内容は、30歳で寡婦となった英国の貴族夫人が2人の子供とイエールに滞在するうちに、親のわからない孤児の少女(セレスティーナ)を引き取って育てることになる。そこから、2人の子供の成長、セレスティーナをめぐる恋愛、遺産をめぐる軋轢、セレスティーナの真の両親の謎など、幾多の波乱を経

てハッピーエンドで終わる物語である。この小説の誕生は、この頃にイエールが避寒地として英国人の中ですでに知られていたことを窺わせるとともに、英国人の中に避寒地イエールの知名度を一段と高めたことは間違いない。

ともあれ、フランス革命（1789）に先立つ20年間のイエールの避寒客には、英国貴族をはじめとするセレブの滞在が数多く記録されており、われわれ日本人には聞いてもわからないが、カーライル伯爵夫人だの、ノートル牧師だの、ジョージ3世の皇太子だのといった名前が並んでいる。フランスの著名人の名もあり、ミラボーとか、シャントレ男爵夫といった名前がみられる。ほかに、中・東欧の王家・貴族の名前もあって、イエールが最初期の特権的避寒リゾートであったことを証明している。

**ニースの利点** ニースは、のちにライバルとなるカンヌやモンテカルロに先駆けて避寒地に選ばれ、「コートダジュールの首都」とか「リビエラの女王」などと呼ばれる中核都市となったのだが、温暖な気候、景観の美しさ、植生の豊かさ等の自然条件では、格別ニースが他より優れていたわけではない。ポアイエは、イエールとニースに共通する自然環境の利点は、「エデンの園」を類推させるエキゾチックな植物・果樹園の存在くらいで、むしろ政治的社会的条件を利点として挙げている。まず、長期滞在する以上、様々なサービスを必要とするので、ある程度市街化した町ないしその周辺が好都合であったこと、イタリア行きのコースのひとつとしてジェノアに渡る船の便があったこと、そして、ニースが当時サルディニア王家の領内にあり（フランスを出て最初のイタリアの町となる）、かつ、当時のニース公国が出入りの関税を廃止したフリーポートであったこと、などがニース滞在にプラスしたのであろうとしている。

ニースの紹介者としては、英国の作家トバイアス・スモレット Tobias Smollett（1721～1771）がよく知られている。スモレットは、一人っ子だった15歳の娘の死を悲しみ、1763年4月、妻とともに旅に出てフランスの各都市を訪れた後、ニースが気に入って、ここで1年半滞在する。翌年の秋にはイタリアに出かけて各地をめぐり、1765年6月にロンドンに戻っている。この時の体験をつづったのが「フランス・イタリア紀行」（1766年）である。こまごまとした日常の出来事を記しており、当時のフランスの旅行事情がよくわかるが、その中でも、「ニースからニースへの手紙」（Letters from Nice to Nice）が同書の3分の1を占め、1年半に及んだニースでの長期滞在について詳しく語っている。

では、フランス革命の前に、どれ位の避寒客が来ていたのか。1787年に英国の貴族115家族がニースで避寒生活を送ったとの記述がいくつかの文献に書かれている。ポワイエが追究したところでは、この数字の直接の根拠はみつからなかった。しかし、1784年のシーズン初めの11月に避寒者を数えた記録があり、これによると、英国人の50家族と英国人以外の18家族合わせて68家族が確認でき、家族と使用人を合わせておよそ300人が避寒生活をおくっていたと推計でき、シーズンが進むに連れて増えているであろうから、当たらずといえども遠からずであろう。確認された中には王族、貴族、貴族以外の著名人が多数含まれているが、例示は省略する。

#### 4) 避寒生活と受け入れ体制

これだけの避寒客が来ているとして、18世紀の終わり頃の避寒客はどのように過ごし、受け入れ体制はどのようなであったのか。

**家具付き借家** 1763年にニースを訪れたスモレットは、さる伯爵が、急いだためにロンドンで借りる以上の目の玉の飛び出る高額の賃貸料を支払わされた失敗を避け、まず宿屋に1週間ほど泊まってじっくりと宿舎を探している。といっても、選択肢はあまりなかった。適当と思われる物件は、町（旧市街）の外に2件の戸建て物件があったが高すぎたため、庭付きのアパートマンにした。広さは戸建てと変わらず、この住居には大いに満足している。ちなみに年間の借料は480リーブル(英ポンドで約20ポンドだから割安であろう)であったという。

イエールにしるニースにしる、18世紀の避寒客たちは旧市街に家を借りることは全く考えなかった。市街地は狭く、汚なく、ハエが飛び回り、下水が垂れ流しになっており、住民が夜8時に全員帰宅するまで、通りは安心して歩ける状態ではなかった(スモレット、スイス人のスルザー、ほか)。建物の階段は汚く、薄暗く、窓ガラスの代りに紙が張られていた(当時ガラスは高価だった)。イエールでもニースでも、市内では1ダースほどのメンテナンスの良い建物以外、とても住めるものではなかった。そういうわけで、旧市街の外に外国人避寒客向けの賃貸用として家具付きの立派な家が多数建てられた。それも一方は海に面し、他方は田園風景が見えるように配慮されて。イエールでは、このような立派な家が郊外に沢山建てられた結果、英国人通り(Faubourg des Anglais)と呼ばれる街路ができた。いずれも庭付きの快適な家で、ボアイエの「コートダジュールの創造」には、そうした借家の状況や賃貸料が一覧表に示されていることは既述のとおりである。借上げの契約は最低で月単位、通常はシーズンの通し(10月から翌年の5月)、ときには年間の借上げもあった。

いずれにしても、18世紀の避寒客は、まだ毎年避寒に来る程ではなく、したがって自ら別荘を建てるまでには至らなかった。別荘を構える避寒客が登場するのは、19世紀も1830年代以降のことである。

**ホテル** この時期、長期滞在の避寒客がホテルを利用することはなかった。ホテルは短期滞在客のためのものであって、家族や召使連れの大所帯の避寒客がホテルを利用するのは、家具付きの住宅を探す間だけであった。また、18世紀のホテル(というより宿屋)はあまりにも貧弱で、上流階級の泊まれる施設ではなかった。本城靖久「グランド・ツアー」(中公文庫)によれば、ドーバー海峡の対岸のカレーに裕福な英国人対象のホテル・ダングルテル(英国館)ができたのが1765年である。このホテルは当時のヨーロッパで最高級のホテルの一つとされ、ベッド数は客用が50ベッド、同行の召使用が80ベッド、合計130ベッドであった。

コートダジュールでも、18世紀の終わり近くになると、イエールに同じホテル・ダングルテルができる。場所は旧市街の外の現在のプラス・デ・パルミエである。1789年、アーサー・ヤング Arthur Young(農業経済学者、1741~1820)がここに泊まって、気のきいた定食 table d'hôte が食べられたと満足している。同じ頃ニースにも高級ホテルが建て

られたとニース人は主張しているが、実際は外国人が泊まれるホテルといえば、ポルト・ド・フランスにあったホテル・カトル・ナシオンだけで、イエールのホテル・ダングルテールには遠く及ばなかった。郊外に外客用のホテル・ヨークが建てられるのはナポレオンの帝政期になってからで、ホテルについてはイエールに一步譲る状況であった。

なお、本城靖久「グランド・ツアー」は、18世紀の英国人のフランス、イタリア旅行の様々な施設・サービスについて旅人の目を通して描いていて興味深い。当時のフランスのホテルの状況も詳しく紹介されているので、併せてお読みになることをお勧めしたい。

**生活物資とサービス** 住居が見つかったあとは、召使を雇うことになるが、これが中々厄介であった。スモレットによれば、女中はいくらでもいるが、良い料理人を探すのは不可能に近いといっている。それに、臨時に雇うことになるので、保証を含めてフランス人家庭で働いて得られる賃金の2倍を払わなければならない。であるとすれば、英国で雇っている女中を連れてくるのが良策だと言う。経費は現地でフランス人を雇う場合の倍はかかるが、彼女に朝食とティーの準備を任せ、夕食は仕出しに頼めばよいというわけである。しかし、言葉の問題もあって、どのみち現地でフランス人の召使を雇わざるを得ないのが実情であった。

町の汚さも大いなる不満の種であった。スモレットは、通りも建物も人も汚く、臭くて吐き気を催すほど、水も不潔だと嘆いている。夜昼間わず蚊や蚊や南京虫に悩まされたとも書いている。彼は夏もニースで過ごしたのである。

他方、彼は几帳面に物の値段を書きとめたうえで、市場で買う食料品は安くて質がよいと褒めている。パンは生焼け、ワインは混ぜものがなされているのが多いと苦情を言っているが、アンチョビのフライは美味であり、スイカや果物は最高であると絶賛している。イエールでは、外国人に必要な日常生活の諸サービスは大いに不足していた。バターは手に入りにくいから買いだめが必要だし、乳牛でも飼うしかないとスルザーが文句を言っている。全体にサービスの質は悪く、楽しみのための施設やサービスは何もない。借りられる馬も馬車もなく、借りるとすればロバくらい、という具合である。その一方で、ニースでは人が担ぐ輿は安くて使いやすい、などというコメントもある。

いろいろ不便はあるが、全体として、南フランスは英国人にとって借家も諸サービスも安く、それが長期滞在しやすい理由となっている。さらに、イエールやニースは、同じ南フランスのマルセイユやアヴィニョンやエクス・アン・プロヴァンスより物価が安く、ニースは（ピエモンテ領イタリアであることから）イエールよりさらに安い。スモレットは、自ら医師でもあったから、ニースの医療が安くて安心できるのが有難いと言っている。ニースには11人の医者（人口15,000人程度）がいるが、それぞれ能力は充分であるうえ、往診1回に付きわずか1ピエモンテ・ソルしか要求しないとやっている。健康を気遣う療養客にとって医療の良否は重要であり、スモレット自身肺結核を患っていたから、ニースの医療の質と値段は嬉しいことなのであった。

**何をして過ごしたか** 18世紀末の避寒客たちは、滞在中何をしていたのか。英国人の避寒客の第一の目当ては、温暖な気候とエキゾチックな植生であり、ゆっくり心身の健康を取り戻すことが何よりの関心事であった。証言者たちの言葉を見ても、彼らは周辺を散

歩したり、植物園や果樹園を見たり、出会う農民たちの気持ちのよいもてなしに嬉しい驚きを示したり、といったことで満足している。古代の遺跡を巡るとか、山に登るようなことは全くしていないし、海にも関心を示していない。

自国では、夏になると涼しい町で水辺の遊びを楽しんだり、社交に明け暮れたりするのが好きな英国人も、冬ではあり、イエールやニースに社交の場は全くないから、ただ無為に過ごしていた。実際避寒地のローカルの社会は、上流階級の英国人からみれば、あまりにレベルが違いすぎて付き合いのできる相手ではなかったし、興味もなかった。カーニバルとか舞踏会、賭けトランプなどの地元の娯楽にも関心はなく、ただ部外者として見るだけだった。町に出ても、漠然と人の行き来を眺め、女と男が腕を組んでいる様に驚き（彼らが夫婦であることはめったにない！）、そして消灯時間になると、あっという間にみんないなくなる様を呆然と見送るのだった。

そして、春には暑くなり、ちょっとした運動でも汗だくになる一方、天候が不安定になって、雨と風が交互にやってくる。これでは風邪をひくだけだといって、3月には帰っていく。スモレットが夏もニースで過ごしたのは、簡単に行ける温泉避暑地が手近になく、仕方なしに居座ったのであった。

教養のある彼等のための施設は何一つなかった。町を理解するよすがになる図書館もなく、外国語の新聞もなかった。ニースには本屋が2軒あったが、スルザーによれば宗教関係のものしかなかった。1777年に600席の劇場が建設され、外国人の観劇も当てにしておかされたはずだが、コミック劇をイタリア語でやっているだけで、外国人は寄り付かず、いつも空席が目立っていた。

のちに売り物になるカジノはどうだったか。1786年にカジノ建設の案が出され、ニース市のアーカイブスにこの時の提案書が保存されている。新造語である「カジノ」という語（イタリア語の *casa* の指小語からきている）が使われているので、設置目的の部分だけ訳出してみよう。

ニースでは、避寒客のための施設が他のどこよりも必要である。温暖な気候が大勢の外国人客を誘引しているのに、彼らを泊める施設はあっても、ある種の施設、外国人客同士が出会い、対話し、読書したりできる場所がない。「カジノ」こそ、地元の社交界や慣習に馴染んでいない彼らが快適な冬を過ごすために、ぜひとも必要な施設である。

提案書には、外国語の新聞雑誌が読めるし、カード遊びもできると書かれている。英国起源のホイストのようなカードゲームにはわざわざ言及しているが、いわゆる賭け事については触れられていない。

いずれにしろ、カジノ建設案はフランス革命と共に消えてしまった。1790年にニースを訪れた避寒客ないし旅行者は、カジノのことは何一つ言及しておらず、娯楽としてはイタリア劇と週一度の舞踏会のことが採り上げられているに過ぎない。

**新市街地の発展と避寒客** イエールもニースも、英国人避寒客が来る前は、鄙びた小さな町に過ぎなかった。18世紀末にイエールで50家族、ニースで100家族ほどの英国人が長期の避寒生活を送るようになって、町は旧市街の外に向かって発展する。英国人は世界中どこへ行っても地元の人たちの中に混じって暮らすことを好まず、それゆえに、住民の居住地と離れたところに《租界》を形成したのだという人もいる。租界というのは居住空間の分離だけでなく、現地の経済や生活に係わろうとしない生活をするのだが、この英国人はそんなことはなく、善意の人たちであり、日常生活において必需品の調達を始め、避寒客も現地の住民との接触を避けているわけではない。ポアイエは、18世紀の避寒客を表面だけ見て排他的と評する歴史家や地理学者が、英国人避寒生活と彼らを受け入れた町の発展とを関連づける試みをしていないと批判している。実際ニースは、1750年にサルディニア王シャルル・エマニュエル3世によって、ニースのリンピア港を開削する工事を開始しているし、トリノ〜クネオ〜ニースを結ぶタンド街道の開通工事を始めてもいる。これらは、ニースをピエモンテ公国の地中海への出口として売り出そうとの意図からである。避寒者の到来は、未来の展開を予感させる出来事のひとつであり、ニースのきたるべき19世紀の発展の予兆なのであった。

## 5) フランス革命とナポレオン帝政の時代

1789年にフランス革命が勃発すると、英国貴族によるイエールとニースの避寒生活は急速に減少し、ナポレオン時代には、フランスと英国の戦争が激しくなって中断する。では、革命勃発からナポレオンの没落(1815)に至るおよそ四半世紀の間、イエールもニースも火が消えたようになったのか。

ニースの記録によると、英国人が毎冬もたらしてくれた30万リーブルの収入(この額はニースの主要輸出産業のオリーブ油の年間収益に相当する)は途絶えたとし、1804年に訪れた人の証言によれば、「素敵な家が立ち並んでいるが、どこにも住人がいなかった。それまで住んでいたのが外国人ばかりだったからである」。この年、英国以外の客、例えばロシア貴族たちがいた一角にも誰もいなかった。

**亡命、避難と通過客** 避寒客が来なくなった後を一時的に埋めたのは、避寒客ならぬ避難客であった。サルディニア王国のヴィクトール・アメデオ3世は、国境を開いて亡命貴族を受け入れた。とくにニースには2,000人の貴族、6人の司教を含む300人余の僧侶が避難してきて、一時的には革命以前の避寒客以上の経済効果をもたらした。見方によれば、彼らは避寒客より金持ちで、彼らによってすべてのホテル、すべての借家が埋められたからである。大半はプロヴァンス地方とラングドック地方の貴族であったが、これらの貴族階級と地元貴族の間には親しみが生まれ、数多くの婚姻が成立したという。1792年にナポレオンの勝利によってニースがフランスの支配下に入ったとき、彼らの大半が難を逃れて出て行ったが、この地に残る者も多かった。

フランス領に組み込まれてからも、ニースの社会構造に大きな変化はなかった。むしろ、すでに滞在地としての名声を確保していたイエールとニースには、ナポレオンの家族をはじめ新しい支配階級がやってきただけでなく、失墜した貴族階級を隔離するのに好都合な

場所であり、彼らの保護と監視のためにこの地に滞在させたこともあって、しばらくは結構賑わっていたという。

**アミアン平和条約と英国貴族の復帰** ナポレオンが権力を掌握し、革命は終わったと宣言し、1802年に英国との間にアミアン平和条約が締結されると、英国貴族はフランス行き禁欲状態から解放される。1802年8月27日付けのフランスの新聞《ジュルナル・ド・デバ》は、「カレーでもディエップでも、英国人が船からあふれ出てきた」と書いた。老貴族は再びパリの快楽を求め、若者はグランド・ツアーに出かけ、病弱な避寒希望者は再びコートダジュールにやってきたのである。

しかし、この盛況は長くは続かなかった。アミアンの平和は英国側が破棄し、1805年には、本格的な英仏戦争が始まってしまったからである。この後、ニースは英国人避寒客を失って重要な収入源がなくなった上に、ナポレオンによる大陸封鎖で食料品の輸入が途絶え、物資が欠乏して住民は苦しんだ。これに早魃<sup>かんぼつ</sup>などが輪をかけて、1790年当時2万人を越えていたニースの人口は半減したという。イエールの方は内陸部に豊かな農地があったことと、幸いナポレオンの妹のポーリーヌをはじめ、帝政下の上流階級の避寒客も多少はあって、ニースほど壊滅的な打撃を受けなかった。

ともあれ、ナポレオン戦争の10年間、避寒地の火は消えたものの、その後の発展のためには悪いことばかりでもなかった。というのは、帝政下に多くの公共事業が行われ、来るべき19世紀のコートダジュールの発展に大きく寄与することになるからである。ナポレオンは、パリからローマにいたる広域交通を改善する大事業に着手し、とくに新たに支配下に収めたニースから、海岸沿いにイタリアのジェノアに至る道路の建設工事を開始している。この道路は、今日ニース付近の斜面を走るコルニシュと呼ばれる3つ街道のうち一番上のグランド・コルニシュがそれである。モナコやヴィルフランシュなど、ローカルな交通は無視し、古代ローマ時代にローマとジェノアを結んでいたアウレリア街道（現イタリアの国道1号線に当たる）に直接つなげる道であった。1810年以降、工事は急ピッチで進められ、マントンからヴェンティミリアを抜けて、サンレモが目前になったところで、ナポレオンが失脚した。この道路開削については当時の誰も言及していないが、まさに、のちにコートダジュールの観光を発展させる重要な一歩なのであった。

(続く)